

「企業」と「働くこと」の学習

－フィールドワークを踏まえた企業研究－

林 隆一

1. 教育改革計画の目的

厚生労働省「新規学卒者の離職状況」(2015年10月)によると、大卒者の約1/3(32.3%)が卒業後3年以内に離職している。これは、大学生が在学中に「企業」や「働くこと」に関しての実際の理解やイメージができていないことが一因だと考えられる。

これを解決するためには、学生に「企業」や「働くこと」に関しての深い理解やイメージを促進させることが必要である。学生が、企業のフィールドワークを通して、より深く多面的な「企業」や「働くこと」の視点を意識し、自律的な学習意欲を促す教育改革を計画した。

企業研究をテーマとしたアクティブ・ラーニングの講義(キャリアアップ講座や演習)の受講生を対象とした。2015年度後期のキャリアアップ講座(企業研究:企業分析の基本手法、理論を理解し、企業研究を行う選択科目)では、文献調査や財務分析の企業分析に加え、企業の工場見学や取材などフィールドワークを行わせ、多面的な議論を促した。以下に、キャリアアップ講座の活動内容を中心に報告する。

2. 教育改革計画の内容

2015年度開講のキャリアアップ講座(企業研究)では、前半で企業分析の基本的スタンス・方法を学ぶテキスト内容等を自分なりに発表し、後半で受講生自ら選んだ企業の分析に応用するプレゼンテーションを行った。①受講生が企業分析の基本を学んだ上で、受講生自ら選んだ企業の分析に応用するプレゼンテーションを行った。その上で、②学生の問題意識や興味に応じて、担当学生が中心になって各企業の取材や工場見学を行った。学生は事前に企業研究を進め、自分なりに「企業」や「働くこと」を考えた。さらに、③受講生が、企業のフィールドワークを通して、より深く多面的に「企業」や「働くこと」の視点を意識することで、自律的な学習意欲で学生コンテストへの参加することを促した。本報告では、この3つのステージ毎に報告する。

2-1. 企業分析の基本を学ぶ

キャリアアップ講座(企業研究)の受講生は、前半で企業分析の基本的手法を『いまさら入門 バフェット—金融危機に負けない投資法』(三原 淳雄著)の輪読で学び、全員が

各章を発表した。『いまさら入門 バフェット（後略）』では、約50年で約5兆円の資産を築いた世界4位の資産家であるバフェットの成長企業を見つける分析方法と応援したい企業を見つける基本を学んだ。この講義は2014年度に日本私立大学協会が募集した「教授法が大学を変える」という企画に、アクティブ・ラーニング等で授業を活性化している事例として紹介された。

講義では発表者以外の全員に質問もしくはアドバイスの発言を求めた。最初は、学生の質問内容も画一的で、質問もたどたどしかったが、毎回毎回、質問しているうちに、他の学生の視点や質問内容を参考にして、ユニークな質問や自分の意見を堂々と言える学生も出てきた。また、他の学生が質疑応答し、最後に教員が補足し、コメントカードを全学生に配布し、回収する。コメントカードには、自分のコメントの内容の他に、気付いたことや発表できなかった質問内容、プレゼンテーションを行った学生へのアドバイスなどを自由な記入を促した。次週の講義の最初に、有意義なコメントは匿名で、全員にコメント内容を報告するようにした。

その上で、昨年度（2014年度）の同講義受講生の先輩から実際の企業分析事例（スターバックスなど）を聞いた。昨年度の各学生が選んだ企業は、ソフトバンク、7&I、サントリー、スターバックス、ワタミ、ドトール、カルビー、グリコ、ゲオ、三洋電機、SMC、川崎重工、学情、帝国ホテルなどである。2014年度は実際の企業訪問を想定しておらず、財務数値の入手が比較的容易で有名な上場企業が比較的多くなった。2015年度の受講者は、兵庫県を代表する企業の変化も意識し、アシックス、IDEC、シスメックス、カネミツ、農協などを選び、それぞれ担当した（図表参照）。各受講生は自分の担当企業（組織）を選び、その企業の財務数値の「定量」分析と経営戦略や理念等の「定性」分析を行い、講義内でプレゼンテーションを行った。発表が進むにつれて、競合に近い企業や全く違う業界の企業など、自分の選んだ企業を基軸として、類似点や相違点など意識することで、より深い理解に至るケースが多かった。2015年度は、学生なりの仮説を構築し、対象の企業とディスカッションを行い、自分なりの検証を行うことを前提とすることで、さらなる分析や幅広い視点からの学びが可能となった。学生には『工場見学のすすめ』（林泰勲・吉田秀明著）などを参考にした上で、事前に発表企業名を報告させ、その企業の資料やデータを配布することで、実際に企業訪問するために必要最低限の知識・情報レベルの確保に努めた。

(図表) 兵庫県に本社を置く上場企業の時価総額ランキング

1994年12月末		2014年12月末	
1 神戸製鋼所	8818億円	1 シスメックス	1兆1198億円
2 川崎重工業	6075億円	2 川崎重工業	9245億円
3 上組	2783億円	3 神戸製鋼所	7615億円
4 住友ゴム工業	1939億円	4 アシックス	5788億円
5 伊藤ハム	1797億円	5 住友ゴム工業	4734億円
6 タクマ	1566億円	6 上組	2951億円
7 新明和工業	1176億円	7 大和工業	2371億円
8 グローリー	1121億円	8 グローリー	2244億円
9 ノーリツ	1012億円	9 伊藤ハム	1566億円
10 大和工業	973億円	10 MonotaRO	1517億円
* ダイエー	1兆634億円	16 神戸物産	853億円
		21 トリドール	732億円
		* ダイエー	533億円

(注)時価総額は普通株式数を基に算出。登記簿を含め兵庫県に本社を置く上場企業を対象とした。

ダイエーの時価総額は14年12月25日時点、他の企業は最終売買日の同年12月30日時点。

2-2. 工場見学や企業取材

2015年度のキャリアアップ講座の各受講生は自分の担当企業等を選び、講義内で事前調査・分析を発表し、自分の問題意識に基づいた事前質問を用意し、実際の企業取材や見学を行った。工場見学や企業取材に先立ち、学生が事前の企業研究を進め、学生自身の仮説や問題意識に沿った質問状を作成した。企業側からの回答を想定しながら、実際に企業とコミュニケーションを試み、当初の自分達の間違いなどを認識した。

以下の報告のように、トラスコ中山、アシックス、IDEC、シスメックス、農協、カネミツの企業訪問/質問では、キャリアアップ講座の各担当受講生などを中心に、受講していない2～4年生も含めて経済学部生のべ100名超の学生が参加した。

① トラスコ中山 (2015/9/2 社長講演、施設見学、グループワーク)

場所：トラスコ中山 プラネット神戸物流センター (ポートアイランド)、人数：32名¹

キャリアアップ講座のフィールドワークに先立ち、2015年9月に経済学部のゼミ生(キャリアアップ講座者含む)中心にトラスコ中山に訪問した。トラスコ中山は、日本のモノづくりを支える、工具や屋外作業用機具の専門商社である。中山社長の「利益だけを追求するのでは企業は存続しえない。人や社会のお役に立ててこそ、事業であり、企業である」とのお話を聞いた上で、学生を4班に分け、同社人材開発部の指導でCSRについてグループワークや併設のプラネット神戸物流センターの見学を行った。

また、ゼミ生(キャリアアップ講座者含む)は工場見学等のできない製造業以外の業種の話も聴講した。日本最大級の動画CMポータルサイトを運営するCMer TVのCFO²や

1 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2015/9/2 参照。

2 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2015/7/10 参照。

パナソニックの中国展開をサポートしたマーケティング調査や広告の経験を持つ（社）日本中華総商会関西西部会副会長³の話も聴講し、学生の活動や意識も広がることを試みた。

② アシックス（2015/11/18・12/16・2016/1/6 報告、12/9 取材）

場所：ミュージアム（ポートアイランド）、人数：14名⁴

キャリアアップ講座者を中心に14名がアシックスに訪問した。猿渡和弘館長から「65年前のバスケットシューズが今のシューズや靴に比べてどこがどう違うのか、機能の進化、素材がどう変わってきたかなどを観察してほしい」などの説明を受け、学生らはスポーツの種目や時代によって求められる優先機能が異なるシューズなどを発見した。同様に、各学生は以下のような企業／組織をそれぞれ担当し、事前質問による仮説の検証を行った上で、講義内での発表を行った。

③ IDEC（2015/11/18・12/23 報告・12/9 取材）

場所：IDEC 滝野事業所（加東市）、人数：6名

④ シスメックス（2015/11/11・2016/1/6 報告、2015/12/17 取材）

場所：シスメックス・テクノパーク（神戸市西区）、人数：9名

⑤ 農協（TPPを踏まえて）（2015/12/2・2016/1/20 報告）

⑥ カネミツ（2015/12/4 社長説明・工場見学、12/17 工場見学）

場所：加西工場（兵庫県加西市）、人数：40名／三木工場（兵庫県三木市）、人数：9名

（写真1）シスメックス・テクノパーク取材の様子（2015/12/17）



キャリアアップ講座Ⅱ（企業研究）受講者の感想コメントは以下の通りである。

- ・「今回、キャリアアップ講座Ⅱを受講して大変良かったです。企業研究の仕方、研究する上で気を付けることなど多くのことを学びました。本当にありがとうございました。」
- ・「資料を見ていて数少ない人数である中で、とても多くの資料が集まって、とてもやりがいのあった授業だったと感じた。正直、この授業をとる時、水曜3限の授業がなく単位のためにとっていたが、先生の話や皆の意見等を言い合うことで、自分とは異なる

3 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2015/10/2 参照。

4 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2015/12/9 参照。

- 考え方をすることができ、就職が近くなっている中で体験や訪問等で非常に参考になり、自分が調べた企業へ実際に就職したいと思った。非常に良い講義内容だったと感じた。」
- ・「今回の講義を受講して大変有意義な時間を過ごすことができました。もう少し伝えたいことをうまく伝えることができるようにしたいです。担当を調べてみて見方も変わり考え方も少し変わりました。分からなかったこと、気づかなかったことができたので、とても参考になりました。」
 - ・「今回この講義を受けての感想は、大学生活の中で一番といっても過言ではないくらい学んだことがありましたし、今後、自分の将来にもとても役に立つことがたくさんありました。すごく楽しい時間でした。短い時間でしたが、ありがとうございました。」

2-3. 学生コンテスト等への参加

企業のフィールドワークを通して「企業」や「働くこと」に興味を持った受講生を起点に、学生向けコンテスト等の参加を促した。実際に、今回の企業調査・工場見学を行った受講生の所属するチームが、日本経済新聞社主催で仮想ポートフォリオ構築を競う「日経ストックリーグ」の学部内発表会⁵で最も買いたいポートフォリオに選ばれた。なお、このポートフォリオの選考基準の作成に、今回の企業訪問の経験を活かし、実際に訪問企業もポートフォリオに組み込んでいる。

キャリアアップ講座では、企業だけでなく、農協組織（TPP）を研究テーマとしたゼミ生がいたが、演習では、神戸市主催で農漁業者と若者、企業の3者がタッグを組み、地元の農水産物を使った新商品やアイデア商品を開発し、その魅力を全国に発信する「KOBE “にさんがろく” PROJECT」にも参加している⁶。

(写真2) 日経ストックリーグ発表会（左）と「KOBE “にさんがろく” PROJECT」(右)の様子



(出所) 神戸学院大学フェイスブック (2016/1/15、2015/11/26、2015/9/2)

経済学部2年生を主な対象とする「企業経済論」の講義では、受講生全員が自分で自由に選んだ企業を、授業で習った理論や分析手法を使って、レポートを作成することを課している。経営戦略(市場原理)と同じ視点で、ライバル(競争相手)と異なる点にのみ

5 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2016/1/15 参照。

6 詳細は神戸学院大学公式 Facebook ページ 2015/9/2～2015/11/26 参照。

価値があるとの考え方を明示し、他の受講生のレポートと同じ部分は評価なしで、他の人と違う部分のみ加点主義で評価しているため、2015年度の提出者240名（レポート300本超、合計約1800頁）が、のべ500社弱の企業を分析している。その中で、今回のIDECの工場見学に参加した2年生（キャリアアップ講座は未受講）は、他の学生が目しめない産業用スイッチやLEDでトップであるIDECを取り上げた。実際の企業取材や工場見学を経て、単純な財務分析だけでなく、SWOT分析、損益分岐点分析などの定量分析や経営理念などの定性分析を行っている（学生の了承を得て、後述の『<企業研究報告書>』（2016年）の77～85ページに掲載している）。

3. 課題と今後の展望

以上の活動等（学生の発表資料、会社資料、学生の質問内容・フィードバック、大学フェイスブック紹介など）は、神戸学院大学経済学部講義（2016年）『キャリアアップ講座Ⅱ2015年度後期（水曜3限）演習<企業研究報告書>』（全168ページ）にまとめ、2016年3月に発行した。

企業訪問では2年、3年、4年の経済学部生のべ100名超の学生が参加し、受講講義、ゼミや学年の枠組を超えて、各種の意見交換や交流が見られた。一方で、有瀬キャンパス中心の企業訪問となったこともあり、経済学部以外の参加はなく、学部を超えた全学的な交流には至らなかった。また2015年度のキャリアアップ講座の受講登録者は7名に留まった。3年生後期の配当科目で毎週の議論が求められ、かつ、キャリアアップ講座の卒業所要単位が12単位以内に限定されており、2年までにほとんどの学生が修得済みであるため、単位修得を必要とした受講者は事実上1名に限られた。受講者は学習意欲が高い学生が多く、発表準備や企業訪問にきめ細かく指導ができた一方で、学習内容の学生全体への波及効果が限定的となった。

今後の学生の企業研究やフィールドワークの先行事例として、今回の活動内容等をまとめた<企業研究報告書>を作成したため、未参加の学生に配布を進め、ロールモデルの説明として活かしていきたい。また、2014年度と2015年度のキャリアアップ講座（企業研究）の受講学生を中心とした「経済学部企業研究会」（12名）が、2016年6月に神戸学院大学同窓会の登録団体に認定された。2014年度受講生（OB）7名は既に都市・地方銀行や一部上場企業などに就職しており、今後、「企業研究」を経験した卒業生（社会人）と現役学生の交流する機会・きっかけづくりに活用したいと考えている。現時点では就職後の定量評価は難しい面もあるが、今後の教学IR活動等で卒業生への評価調査が進めば、将来的には定量的学習効果の測定もできるようになる可能性もある。

<謝辞>

以上の活動の多くは神戸学院大学教育改革助成金の支援を受けました。また報告の通り、多くの企業・組織のご協力をいただきました。担当者の方々には心より感謝申し上げます。